

輪島市で病院支援、患者搬送

市立輪島病院は、断水状態の中で病院に入院している患者を徐々に近県などの病院に移す一方、市内の救急患者を受け入れて市内で唯一機能している病院として医療活動を継続していました。

病院では、手洗いの水やトイレを流す水にも困る状態。6日夜、城西病院 DMAT チームは持参したポリタンクと水で手洗いを行える場所を設置、その廃水を使ってトイレを流すことができましたようにしました。

翌7日、近藤、福嶋、津久井の3看護師は輪島病院の病院支援を行い、村田医師、永井、井形の両業務調整員は輪島市役所に立ち上がった保健医療調整本部に向かいました。

被災から約1週間が経過し、災害による負傷者の救護から、避難所などで暮らす被災者の医療支援に移る状況の中で、輪島病院の支援では感染予防を病院スタッフとともに取り組みました。コロナ禍の経験を生かし、まず発熱患者とその他の患者の動線を分け、発熱外来を設置しました。3人の看護師は深夜零時まで、病院を訪れる患者や救急車で搬送される患者の治療に当たりました。

村田医師と永井業務調整員は、孤立した避難所で肺炎疑いなどのある2人の高齢者の医療支援に向かいました。当初、自衛隊ヘリでの搬送を予定していましたが、降雪が激しくなり、陸路で向かうことになりました。午後1時半ごろ自衛隊とともに道路崩落や積雪のある道を徒歩で向かって診察。幸い症状は軽いものの病院に搬送する必要があると判断、道なき道を担架を担いで患者を搬送し、午後7時半、輪島病院に到着し無事搬送を終えました。

保健医療調整本部は、DMAT、市役所、自衛隊、警察、海上保安庁などさまざまな機関が密な連携を行うために設置。井形業務調整員は、午後11時過ぎまで、刻々と寄せられる情報を整理、記録する業務に当たりました。

今回の派遣では、被災者にとって一番よい医療支援をできるところからという思いで、チーム全員が全力で取り組みました。

2024年1月10日



輪島市内の様子



輪島病院の支援



輪島市滝又町で患者搬送



輪島病院に多くの患者



輪島市保健医療調整本部

